

「宗教と社会を歴史的に構成する基底」たる氏神祭を通じて、農村の歴史的背景を明らかにするにあつたという。氏神祭は、同族結合

更には村落結合の紐帯とも云うべき機能を果すものであり、従つて、村落の具体的実態を知る上でいゝば要とも思われるのであるが、氏自身が民俗学者である事に由来して、又テーマからも当然の事乍ら氏神祭自体に就いての究明が主となり、その社会的背景に遡言及されなかつたのは、歴史研究者の末端に連なる我々としては物足りなく思われるし、歴史学と民俗学の結合も、民俗学内部での歴史派と機能派との止揚の段階に止まつた感を受けるのである。しかし、伝承を「歴史的系列」の上に位置づけられた、という点だけでも、従来の民俗学研究には数少ない業績の一つと言ひ得よう。

以上甚だ主観的な感想と疑問点を述べて来たが、これにより、中世史研究不振の中にあつて占める本書の意義と価値を些かも傷つけるものではない。又常日頃御指導を頂いてゐるこれら諸先輩に対して敢えてした数々の非礼は、その秀れた成果を既に自明のこととして認めた上での、そして同じ道に従う一後学

の、未熟さによるものであるとして備えにお救しを願う次第である。

最後に、相当な頁数に上る附録、即ち各庄の文書目録・年表・系図及び種々の統計表を附けられた事は今後の研究者にとつて非常に有益であり本書の価値を更に高めたものといえよう。各研究者の労を多としたい。

(本文三六二頁、一二〇〇円、創元社)

——村井康彦——

尾留川正平編

経済地理(新地理学講座第6巻)

経済地理という分野は地理学のブランチの一つとして非常に大事な部分を占めるにも拘らず、その内容が広範囲に亘つており、更に敢えて言えば、学としての経済地理学の対象が漠然とさえして、現段階に於いては余りに広くなり過ぎた開口に比べて、奥行の方面に十分に深められていない憾みがある。加えて隣接諸科学との間にも到底はつきりした境界線を引き切るわけにもいかず、これまた謂わば建築途上の家の中が雑然と足の踏み場もない状態の時に早くも近所との交際が始まつているのにも例えられる。こういう経済地理

学の現状に於いて一冊の指針書が三百頁たらずの程度で、この内容を能くまとめ上げるところでないことは言う迄もない。本書も当然その間の事情を知りつつ敢えて講座の一篇としてこの苦難に当面しなければならなかつた事を思うと、編者以下各筆者の努力には敬意を払わなければならない。

内容は総論として佐藤弘氏が経済地理学の定義・研究対象・方法論・領域という最も困難な問題提起を担当し、以下、農業を尾留川正平等、牧畜業を田辺健一、林業を青野寿平、土地利用を小笠原義勝、水産業を青野寿郎、鉱業を尾原信彦、工業を幸田清喜等、商業を国松久弥、交通を有末武夫の諸氏が分担して計十章四十四節に分けてゐる。分担者の中で農業経営の節を担当する三沢謙郎、鉱業の尾原信彦、工業の和田篤夫の各氏はそれぞれ隣接科学の人々であり、地理学の扱ひ方は側面的であることはやむを得ないし、或る意味では地理学の側にこれ等の問題と正面から取り組むことの出来る人々が少いこと、又は経済地理の中で殊に如上の部門が日本では未開拓であることを示したものであり、その点、この章別、項目別の担当者名を並べた目次が既

に斯学の一端を暗示しているとも言えよう。更に極論すれば畜産地理・水産地理・商業地理・交通地理と言う部門は、それぞれの担当執筆者が殆ど独走している感を持たせる部門であり、取扱い方には何れも独断をも許さぬ点も見えるのである。そこで各部門の扱ひ方の特色を見ながら詳評を加えて見よう。

I 経済地理学総論(佐藤)で先ず執筆者は「経済地理学とは経済現象の空間的京縛性(Raumgebundenheit)を科学的に研究することである」と定義してディトリッヒやベンクと同じ立場を表明している。そして研究対象——目次に研究対称という誤植を残して読者に奇異の念を抱かせるのであるが——としての経済現象と経済地域という二つが対称点にあるのではなくて現象と地域の関連に於いて把握すべきであり、寧ろ経済現象の側から等質的な或は異質的な地域を究明するのである、と論じて地域研究への立場を示しているが、以下の各部門の執筆者とはその立場が必ずしも同一ではない。方法論および領域という項で氏は環境論以来の学史を抄録して現在に至るまでの斯学の動向の一端を紹介しているのは、斯学が独り立ちしようとする現在に

於いて、正に時宜に適したものと見えよう。ラツツェル、ヘットナーからウィットフォールに至る「環境」の問題の扱ひ方は氏の執筆箇所中の最も得意な部分であり、オムスキヤや毛沢東の論を通じて新しソ連や中国にも配慮を怠らない細かさは、此の種の概説書の第一章としては行届いたものと言えよう。

II 農業の部分は更に農業地域論(尾留川)、農業経営(三沢)、農産資源(竹内)の三者で細分している。此の章で全体の頁を占め、殊に農業地域論だけに四十頁近くを割いているが、現在の日本で経済地理学に志す人達の数を部門別に見るとこれは妥当であるかも知れないし、更に日本という国の特殊性が此の問題に多くの知能を結集しなければならぬという宿命にも基いている。然し日本以外でも余りにも多くの学者・学徒が余りにも奔放な活動をしている部門であるだけに、農業地域論を扱う執筆者は少しでも多くの海外学者の論拠を紹介することに精一ぱいであつたようだ。環境論にしても生態学的研究にしても最初の試みを向けて来るのが此の分野であるだけに筆者の此の態度は懇切で誠に有難いに違いない。そして地域区分の指標・境界

の問題で更に幾つかの国内の学者の意見にも触れた上で自らの結論を生産手段・民族的経営方式・作物種類・集約度・経済形態と言う五つの指標によつて具体的に分類し十二の農業類型としてこれを説明している。農業経営の項に關しては農業経営学専攻の執筆者であるだけにその論説は整然として居り、従来地理学内部には見られなかつた明晰な説明を与えられる。古くチューネンによつて教えられた農業経営の問題を交通・自然・主体(経営者の側)・動態(経済的変動)の要因から扱つて日本に於ける農業経営の問題の所在点を指摘されたのは地理学徒に取つては得難いものであり、地理の問題としてこれをどう展開するかは今後の地理学徒の任である。農産資源という表現で扱われた項目も、執筆者に人を得て全巻中最も平易な叙述で要領よく「資料」を与えている。然し振返つて農業の全章を見る時に、果してこれで農業地理というものが概観されたらうか、という疑問が残るのは私だけではあるまい。

III 牧畜業(田辺)とIV 林業(尾留川)とを比較するとここにも本書の癖の一つが見られる。林業の方は編者自身の執筆でその態度は

先の農業地域論の時と全く同じで、学界展望と言ふ形を忘れないばかりに、つい筆の運びは遅く、一方牧畜業の執筆者は農業に対する牧畜業の位置づけということもせずに、いきなり牧畜とか家畜とかいう概念を提示して、その上で筆者の研究方針をそのまま牧畜地域の問題として展開するので筆は早い。

V 土地利用(小笠原)という一章が独立して掲げられたのは好い。農・牧・林の三章を或る点で絞つて更に鉱・工への繋がりをも予測させている。執筆者が地理調査所の人であるので土地利用の問題を統計のことと共に特に取立てているのは、具体的な問題の触れ方が少し本書では、唯一の具体論である。

VI 水産業(青野)では漁村の問題の第一人者としての執筆者の、自信に充ちた解説が見られる。漁場と漁村に分けて筆を進めるが、筆者が多年の研鑽の成果を持つ漁村の問題よりも、寧ろ漁場の問題説明に多くの頁を費している点、意欲的な試論のいきの良さが汲み取れる。然し客観的には矢張り短いながらも漁村水産地理学の方が含蓄が深く、漁場水産地理学の方は問題提起に止まつている。

評
VII 鉱業(尾原)では資源・経済・技術とい

う点から論を始めており、殊に技術は微細に亘つている。その後にいわゆる「地理学的側面」の項が控へ燃料動力・輸送・労働力という多くの問題を内包して、従来余り考えられでない鉱産地理に清新の気風を吹込んだ。

VIII 工業は農業に次いで問題の多い部門で、在来工業(幸田)、近代工業(和田)と分けて扱つてあるが、前者では西陣機業地と輪島漆工地とを例証して在来工業の地域性の問題に資しているのに反し、後者では地理学料出身の工業専門家が工業地理の問題を工業立地論・工業地帯論と大上段から振りかざした正攻法であり、経済学・工学の立場からする工業地理に対して地理学の立場からの体系づけを主唱し、しかも観念的にのみ地理学の立場を固執する愚を戒めているが、このベラドックスこそ執筆者の経歴が言わせる言葉であり、地理学徒に取つては一つの警鐘である。

IX 商業(国松)では経済地域の問題を中心に扱つており、商業という経済現象に主動的に表現され、商圏の問題も貿易の問題もその観点から論及されて行く。即ち地域的分業という捉え方で一貫しているので論旨は判り易い。

X 交通(有末)は地理学を持つ空間性という点から当然重要視さるべき要素であり、殊に近代産業の諸問題に關して近代交通の果す役割は非常に大きい。然し交通機關・交通路等が経済地理学のどの部門にも重要な一要素を占めているにも拘らず、さて交通だけを取上げた交通地理学という分野は従等籌關に附されている。更に通信という分野になれば都市地理専攻の一部の人が関心を持つ程度で殆ど未開拓に近い。そこで執筆担当者は、地理学に於ける交通の概念規定や、交通地域の設定には自身の試論を前面に押出して居り、此の巻末を飾るべき自覚も感ぜられる。

以上通観して此の書を持つ多面性は一応紹介したが書評というには余りに舌足らずであり、寧ろ浅学非才の身が先達諸氏に質問の幾つかを呈したと見て下されば幸いであり、殊に全巻を讀したあとに依然として残つた最大の疑問は、やはり、経済地理学は如何にあるべきか、という巻頭の問題であることを附記しておく。

(二九八頁、四八〇頁、朝倉書店)

大島 襄 二